

Title	六年間+ α
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文. 112 P.9-P.11
Issue Date	2019-06-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/77198
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

六年間 + α

出 原 隆 俊

まず、私の信多先生との出会いから始める。一九八五年の十二月に、私の最初の赴任先広島県立女子大学に先生が集中講義に来てくださった時のことであった。

その時、他のことはほとんど記憶にないが、当時、先生が五趣生死輪廻のことに関心を持っていらつしゃつたと記憶する。芥川の『邪宗門』にかかわることだが、私が別のことと取り違えて口にした時に、「勘違いされています」とおっしゃつたのを覚えている。その冬は私が着任して五年目で、京都教育大学に転任することが決まっていた。それで先生から「関西で飲みましょう」と言っていた。その話題となったかと思える和食の席では、女子大の友人先生が絶賛される賀茂泉（賀茂鶴ではない。信多先生の呉春にあたらうか）が出されたはずである。酒との関連では、私は酒の当てとして蝦蛄が大好物（太宰もそのようだが）であったが、広島では盛んに買い出しに出向いた。この蝦蛄好きは後に阪大の研究室旅行で日生近辺に宿泊した際のエピソードにつながる。

私は広島 of 行商のおばあさんから、蝦蛄のおいしい料理法は湯搔くのではなく、蒸すのが一番良いと聞かされていた。それで日生の旅館で蝦蛄が出された時、仲居さんと論争したが、前田先生は色んなやり方があるのでしようとおっしゃり、信多先生は、まだ蝦蛄が残っているとたくさん差し出してくださった。

さて、京都教育大学に在籍して三年目の夏、信多先生から電話をいただいた。広島でのことがあったので、やや疑問を持ちながら「関西で飲もうという話でしょうか」と申し上げたところ、「もっと深刻な話です」とおっしゃり、こちらは二人で会いたいとのことだった。どういうことだか見当がつかなかったが、大阪でお会いすることになった。この時私は足を痛めていた。通勤でJRの山科で乗り換えて京阪の藤森まで行っていたが、ある夜、少々酔っていた。急ぐ用があって、京阪の駅でJRに向かう際に階段を飛び降りたのだが、無理をしたのでアキレス腱あたりを強く打っていたのだ（そのまま放置していたが後に、アキレス腱が切

れていたらしいこと、しかし、なまじ手術を受けるより結果としてよかったと言われた。足のケガが原因ではなかったが、約束の時間に間に合わない事態となり、在来線ではなく京都から新幹線に乗った。結果的には在来線の新快速利用より二分ほど縮まっただけだったが、とにかく慌てた。信多先生と伊井助教に待っていただくことになった。様子から足を痛めている説明をした後、すぐに用件のことになり阪大に來ないかとの誘いだった。臨時定員増の関係で、国文学の領域に教授+助教の講座枠にもう一人助教が採用できるようになったとのことであった。近代文学で採用しようということになり、お二人がそれぞれ候補者を探したところ、私で一致したとの説明を受けた。教育大を三年で去ることへのためらいはあったが、広島でのご縁もあり、ありがたうお受けしたいと申し上げた。この時、お二人はパソコンの話で盛り上がり、信多先生は画像を取り込みたいと話しておられた。伊井先生のパソコン通のことは後々ずいぶん知ることとなる。阪大に着任後のことになるが、信多先生に連れられて田中裕先生のところにご挨拶に伺った。率直なところ、こういうことまで伝統を踏まえるのかといささか戸惑いを覚えた。この時期、信多先生は文学部長をされていたと思う。信多学部長になって、教授会にコーヒーブレイクの制度が導入されたらしい(ただ、これについては史学系などがこの間に講座の枠を超えた会議を開いたらしく、先生は本意に思っておられたようである)。教授会が終わる十五分前にはお茶と和菓子配られた。これは先生の発案

かどうかはわからないが、とにかく「優雅」という印象を持った。しかし、やがて教員にも様々な書類づくりなどの雑用が増えたり時間に追われるようなことになって、数年後にコーヒーブレイクは廃止された。また、事務職員の削減などもあり、和菓子のサービスもなくなった。そして、ポットを置きコーヒーセットで自分で湯茶を入れることもになり、それもわずかな期間で廃止され、必要があれば個々に飲み物を用意することになった。こうしたことは大学をめぐる状況が世知辛くなることと呼応しているようにも思われた。信多先生が退職された時期はどの段階であったかは明確な記憶にないが、大学の「古き良き時代」の終焉と重なっていたように思う。教授会の後、所属を超えて教員が近くの寿司屋で議論を続けるといような習慣も、店主の急死とも重なって、なし崩しに無くなったのもそれと軌を一にしていたようだった。

学部内では、臨時増が終わったが、文学部には教員の定員増が固定的に認められた。それにかかわって、文部省の意向も意識した、従来にはない現代文学講座の設置が模索され、さらに一転して先例のある比較文学講座の設置、さらには中国文学講座の設置となるのだが、私も一時期この動きに翻弄されることもあったが、前田先生がいろいろと御苦労をされることがあったり、信多先生の決断もあつて、現行の形に落ち着いた。退官される前の時期に、助手の任命をめぐつて、後任の文学部長と議論になることがあつたようだ。相当紛糾することもあつたようだが、先生は綿密に自説を補強されて決着した。このように、先生は阪大文学部の一時

代に大きな存在感を示された。その後、文学部は大学院重点化が果たされることになるが、すでに信多先生は退官されており、文学部全体を率いる形で伊井教授が大変なご苦勞を果たされたことをお知りになることはなかった。

先生が退官された後も、ご縁は切れなかった。神戸女子大に移られたが、すぐ後に近代文学担当の濱川先生も奈良女子大から着任された。その濱川先生から私は非常勤講師を依頼されたが、信多先生のご意向もあったかなと思う。私が出向く日は濱川先生は出講されない日で、信多先生は出ておられた。月に一度くらいは三宮などでお酒をご一緒した。人から紹介されたといういわゆるおかまバーでカラオケも歌われた。先生に持ち歌は多く、自らも作詞をされて作られた歌があることもご存知の方も少なくないかと思うが、「天城越え」がお好きで朗々たる歌声は今も忘れられない。酒のことでは、かつて阪大近くの先生のお気に入りの店のポトルには「夢」と書かれていた。また、お初天神の高齢の女性が経営するバーで、いわゆる大学紛争の時に教授会が学外だったかで行われ時に来たことがあるとうかがった。その店では、高齢のためか相場に疎く、請求額が安いことを心配されていた。それは逆に石橋の何度か連れて行っていた店で、なぜか高いと言わざるを得ない請求がなされたことがあった。以前に東京の本郷で客が少なくても収入を得たい店主が水増しした請求に私は苦情を述べた経験があるので、どうされるかと思っただけだが、おそらく計算違いだろう請求の通りに支払われた。退職を

近くに控え、もう二度と来ることはないから許容されたのだろう。

ところで、礼賛一色に終始しないために次のようなことも記すべきであろう。これもまた信多先生とのご縁で、芦屋市の市民対象の講座で樋口一葉のことをしゃべった時、ある高齢の男性が信多先生の講座を聞いたとして、感想の一端として「信多先生は自分酔ってはった」と言っていた。聴衆を盛り上げようとされたことが、そういう受け止め方をされたということだろう。私のことでは、『待兼山論叢』の「研究の視点」で「イマイチ」という言葉を使ったところ、初稿の時に、俗語的にすぎないかと指摘され、これには素直に従った。先生が阪大を退職された後のことだが、拙著に収録した『にこりえ』の〈彼の人〉については「尻切れトンボだと感じた」と感想を記されたことには、正面から反論した。『文学』に掲載されたこの論文が当時どのように評されたかを紹介しつつ、「その先は不要だと考えるのでそれ以上は書かなかつた」とお答えした。それについては、穏やかに「そういう論じ方もあるのですね」というお返事をいただいた。また、あることをめぐってご発言を直接伺った。それについては、ルール違反だと考え、お諫めした。

六年という短い期間とその後のことだが、大学人としてかけがえない経験をさせていただいたという思いが今さらのように深い。

(いずはら・たかし 大阪大学名誉教授)